■リーダーズ・ナウ［在学生インタビュー］

LEADERS NOW!

代々引き継がれる紫紺の団旗と太鼓

「応援する楽しさ、応援される喜び！」

充実した大学生活の秘訣は応援団にあり

◉第102代関西大学応援団

社会学部４年次生　団長（吹奏楽部）
森口 友翔 さん（兵庫県立伊丹北高等学校）

文学部４年次生　副団長（バトン・チアリーダー部）
岸田 愛菜 さん（関西大学第一高等学校）

化学生命工学部２年次生　部長（リーダー部）
桜田 凌成 さん（兵庫県立長田高等学校）

▲千成瓢箪

100年以上の歴史を誇る関西大学応援団。応援団としての魂が込められ、代々引き継がれる紫紺の団旗、団太鼓、千成瓢箪などといった団道具を用いて、演舞演奏と声で関西大学の全学友を鼓舞する。現在はリーダー部、吹奏楽部、バトン・チアリーダー部の３部から成る総勢147人の団体だ。活動の醍醐味や目標について、団長、副団長、リーダー部長へインタビュー。長き伝統を継承する団員たちは、関西大学への愛と、葛藤や議論を重ねながら向上していく「団」の矜持にあふれていた。

◉応援団を目指し関西大学へ

●団長 森口友翔さん

「中学生の頃から関西大学応援団に憧れていました」。そう語るのは、関西大学応援団第102代団長の森口さん。森口さんは吹奏楽部で打楽器を担当する傍ら、2023年12月に団長に就任した。「父が元副団長という縁で、昔から関大野球部の試合をよく見に行っていました。私も野球をやっていたのですが、試合よりも応援団ばかり見ていました(笑)」。学ランや羽織袴姿で勇壮に舞い、あらん限りの声で応援をする団員たちに心惹かれた。「吹奏楽部に入ったのも、団の一員になるためです」。一貫した思いが実を結んでいる。

▼リーダー部、吹奏楽部、バトン・チアリーダー部の3部が所属する関西大学応援団

◉日々、自分の成長を実感

●副団長 岸田愛菜さん

副団長の岸田さんは、バトン・チアリーダー部所属。応援団として活動する際には、バトン・チアリーダー部の衣装ではなく羽織袴姿になり、壮健な演舞で魅了する。「応援団員としての活動なので、チアのユニフォームで応援できないことに抵抗はありません。むしろ副団長になったからには団を引っ張りたいという気持ちが強いんです」。もちろん、森口さんも応援団長として応援する時は打楽器を置き、羽織袴を着て団の先頭に立つ。

そして、歴史的に関西大学応援団の中核を成すのは、桜田さんが部長を務めるリーダー部だ。応援の中心に立ち、活動を主導し、イベントを運営するという文字通り団をけん引する部だ。「新入生歓迎オリエンテーションで当時のリーダー部長に声を掛けられ、人柄に惹かれて入部を決意しました。リーダー部なら自分が成長できるような予感がしました」。何事にも積極的に動けるようになり、２年次生にして成長を実感している。

◉応援される側にもなれる喜び

応援団の活動は大きく二つ。一つは、体育会をはじめとするクラブの応援だ。「特に野球部の試合には熱が入ります。明治神宮野球場で応援をするのが夢なんです」と森口団長。もう一つの活動は、学内外で行う演舞演奏。卒業式・入学式といった大学のイベントや式典に招待されるなどして、演舞演奏を披露している。岸田さんが「応援団で企画する団祭が好きです。見た人に元気を与えること、応援団を応援してくださる方々への感謝を伝えることが目的ですが、いつも応援する側の私たちが、たくさんの方から応援していただけるステージなんです」と語れば、桜田さんは「私は連盟祭です。普段はライバル同士の関関同立の応援団が、京都駅のステージで一堂に会して演舞演奏をするんです。同じような活動に取り組む他大学の仲間たちから刺激を受け、自身の活動に還元することが楽しいんですよ」と話す。

◉団の一員という自覚の芽生え

しかし、団の運営には課題も少なくないという。

例えば岸田さんは、後輩のモチベーションアップに心を砕く。「応援団としての活動とバトン・チアリーダー部独自の活動との両立が難しいです。例えば、チアリーディング大会においては、普段の応援活動と違ったスキルが求められるため、両立に悩みを抱える部員もいます」。忙しい中で団としての活動も楽しんでもらうために、岸田さんが導き出した策は「まず自分が楽しむこと」だ。「誰かのために懸命に活動した後の達成感で、笑顔になっている姿を見てもらうようにしています。結果、『応援に行くのが楽しみ！』『またイベントに出たい！』といった声が後輩から上がるようになり、応援団の一員という自覚が芽生えてきました」と岸田さんは顔をほころばせる。

●リーダー部長 桜田凌成さん

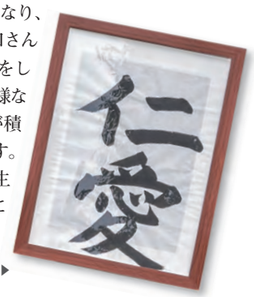
一方、リーダー部の悩みは部員確保だ。現在は桜田部長を含む２年次生が３人、１年次生が１人という構成で、吹奏楽部96人、バトン・チアリーダー部47人と比較すると、寂しさを禁じ得ない。「昔ながらの堅い印象があるのかもしれませんが、継承すべき部分を見極めながら、時代の変化に合わせて活動内容もアップデートされています。トレンドの曲に合わせたオリジナルの演舞もあり、苦しいこともありますが楽しい部です。礼儀礼節をはじめ、社会性が身に付き、心身の成長につながる部活動なんて、そうはないと思っています」。たぎる思い、あふれる魅力を後進に伝えるのが使命だ。

◉皆が納得するまで話し合う

団長の森口さんに、組織運営上の悩みはないのだろうか。「三つの部が一つの応援団として活動しているので、意見の取りまとめには難しさもあります」。総勢147人の大所帯。しかも、各部が全く次元の異なる魅力を有している組織では、日々の活動やパフォーマンス内容などで意見のぶつかりが少なくないという。「でも私はポジティブにとらえています」。意見の対立は、団を盛り立てよう、良いパフォーマンスを披露しようと思えばこそ。最近では応援団について学ぶ研修会の実施にあたって、３人はじめ幹部の間で激論が交わされたと振り返る。「一方は『レクリエーションを中心にお互いを知る機会にするべき』、一方は『研修である以上、座学などを取り入れるべき』と、意見が割れました」。最終的な団の結論は「両方全力でやる！です。時間は限られていましたが、やり繰りをして実現。トップダウンではなく、皆が納得できるまで話し合って決めるのが、関大応援団です」。

◉稀有な経験を得られる活動

最後にそれぞれの目標や応援団の魅力を改めて聞いた。団のスローガンについて語ったのは岸田さん。「互いを思いやるという気持ちを込めて、私たちは『仁愛』を掲げています。この言葉を体現する応援団を目指したい。そのために私が率先して周囲に気を配り、思いやりのある行動を心掛けています。そして、応援団での活動が人生で一番充実したと思えるようにしたいです」。桜田さんはリーダー部の誇りをのぞかせる。「今は先輩方に引っ張ってもらっていますが、本来応援団はリーダー部が中心にならなくては。自分が４年次生になったら団長になり、先頭に立つ覚悟でいます」。そして、森口さんは、「応援をして感謝される喜び、議論をして何かを作り上げる達成感、学内外の多様な人とつながれる価値。これほどの経験が積めるのは、応援団ならではだと思います。将来社会に出たときの予習もでき、大学生活も充実させられる。応援団って本当に素晴らしいと思います」。



第102代関西大学応援団のスローガン▶